

宮澤賢治 生誕120周年

記念連載

銀河鉄道の夜空へ Al Nokta ĉielo de la Galaksia Fervojo

四

銀河ステーション
アルビレオの信号場

★これまでの連載記事は（宍）2016年12月号、
（武）2017年08月号、（参）2017年12月号、
でお読みいただけます。webで「国立天文台
ニュース」のバックナンバーをご検索ください。

文：渡部潤一／「銀河鉄道の夜空へ」制作委員会

写真：飯島 裕

木村記念館で不思議な体験をした後、木村先生とおぼしき姿の人物が手にしていた星座早見盤は12月1日20時にセットしてあった。確かにすでに外は暗かった。その星座早見を手にしたまま、外へ出てみると、そこには東京では見られない星空が広がっていた。西の空には夏の星座たちが沈みつつあり、はくちょう座が地平線に向かって落ちる姿を見せていた。「見事なまでの北十字だなあ」

そう思いながら、星座早見と見比べていると遠くから、かすかな音が聞こえてきた。次第に大きくなっていく、その音は明らかに蒸気機関車だった。

（そんなはずはない）

現実に戻って、そう思いながらも、北十字のあたりの天の川が妙に明るく輝いている気がした。そして、蒸気機関車の音はなんだか東北本線を外れ、こちらに向かってきているのではないか、と思うほど大きくなったのだった。と、天の川は妙にピカピカと光り始めて、なんだかオーロラが点滅しているようだった。それを見ているうちに、不思議に眠くなった。

「おぎゃぐさん、おひなてくなんしえ。終点でがんす」

次の瞬間、自分がどこに居るか全くわからなかった。いつものように通勤列車で寝過ごしたのか、とも思ったが、お酒を飲んだ覚えは無い。しかも、周りを見渡すと、車内はとても狭く、天井の電灯照明がぼんやりと光を放っている。旅の途中だったのか？ いや、そんなはずはない。確か水沢に出張していたはずだが、と思ったが、それにしてもいまだき東北本線の鈍行列車だって、こんな古びた車体ではないはずだ。椅子も金属では無く木で出来ている。床もワックスが塗られた木のように、独特のにおいがしていた。

さて、いったいここはどこだ、と窓外を見る。駅名標は「土沢」とあった。さらに疑問が深まった。そんな駅は東北本線には無かったと思うが、それにしても照明が古びている。昔の裸電球である。電球を覆う笠も真鍮のような古いタイプだった。いったい、と思うまもなく、起こしに来た車掌にたたみかけられる。

「まんずあまり見ねもよう（恰好） だなはん。どっからおでんした。切符ば見せでけんじゃ」

改めて車掌を眺める。そっちの方こそ、ずいぶんと見慣れない装いではないか、と思った。赤い帽子に、いささか大げさなマントのような制服を身にまとった、背の高い人物だった。うーむ、どこかで見たことがあるような、と一瞬思ったのだが、なにせ手を出して切符を要求されていたので、それどころではなかった。

「さあ」

わたしは困って、すっかりあわててしまった。なにしろ、この汽車に乗った覚えも無いのだ。もしかすると上着のポケットにでも何か入っていなかったかと思いながら、手を入れて見た。いつもなら長距離切符は上着のポケットに入れるのだが、案の定、何もなかった。すると、その様子を怪訝な顔で見ていた車掌が、わたしの座席の傍らに置いてあるものを指差して「これは？」と尋ねてきた。それは水沢の木村記念館の部屋で見つけた星座早見盤であった。なにしろ、車掌が手を出しているので何でも構わない、渡してしまえと思って差し出すと、車掌は背筋を伸ばし、まっすぐに立ち直って、しげしげとそれを眺めはじめた。背の高い車掌がますます高く見えた。と、なんだか敬意を払うような口調で

「これは三次空間の方からお持ちになったのですか」とたずねたのである。一体、何を言っているのだろうか。三次空間だって？ それに、さっきまでの強い訛りは？ なにかの聞き間違いだろうか。そう思いながら、いずれにしろよくわからなかったので、「何だかわかりません」

と答えるのが精一杯だった。わたしはまったく事情がのみ込めず、きょとんとしていると、車掌はいささか苦笑いしながら丁寧に早見盤を操作して、その表面になにやら書き付けると

「よろしゅうございます」



とあって、星座早見盤をわたしに返してきた。回した早見盤は12月8日00時の星空がセットされていた。そして、書き付けられた文字を見ると「そらにはちりのように小鳥がいて…」

と記されていた。これも、どこか見覚えのあるフレーズだ。いったい、なんでこんな一節を書き込んだのだろうか。怪訝に思いながらも、少しだけ現実に戻って早く新幹線に乗り換えないと、東京に帰着けないと思った。それにしても土沢ってどこだっけ？ いずれにしろ終点と言われたからには降りなくては。

そうして周りを見て忘れ物が無いのを確認し、慌てて席を立とうとしたのである。すると、窓外の遠くか、駅舎からか、ふしぎな声が聞こえてきたのである。

「銀河ステーション、銀河ステーション」

と云う声をしたと思うと、いきなり目の前がぱっと明るくなった。まるでダイヤモンドのかけらをひっくり返して、そこに強い光線を充てたように、目の前がきらきらと輝きだし、わたしは思わず何べんも目を擦ってしまった。

そして再び正気に戻ってみると、いったいどうしたのだろうか。降りようとしたのに、汽車が動き始めている。ごとごとごとごとと、先ほど終点についたはずの小さな列車が走りつづけていたのだ。すると、先ほどの背の高い車掌が、そばにやってきて少し腰をかがめて窓の外を見やりながら、こう言った。「もうここらは白鳥区のおしまいです。ごらんなきい。あれが名高いアルビレオの観測所です。それでは、よい旅を…」

その瞬間、私の頭の中ですべてが一瞬にしてつながった。どこかで見たことのあると思った車掌は、宮澤賢治その人だった。続けて星座早見盤に書き込まれたフレーズも思い出した。『春と修羅』に収録されている「冬と銀河ステーション」の出だしである。すると、土沢はかつての軽便鉄道の終着駅か。だとすると、いま乗っているのは、もしかして銀河鉄道なのか。

ハッとして、再び窓外を眺めると確かに、黒い大きな建物が四棟ほど立っていて、その一つの平屋根の上に、眼もさめるような輝きを放つ透き通った二つの玉がまわっている。確かにアルビレオの観測所だ。幻か、現実か区別がつかなくなった私は、放心状態でくるくると回っているトパーズとサファイ

ア色の玉を見つめていた。と、列車が急に速度を上げた。アルビレオの観測所は後方に過ぎ去り、ガタン、ゴトン、トタタンターンとポイントを通過する音がしたかと思うと、列車はいささか長いカーブを描きながら、北へ進みはじめた。すると、車掌の賢治がこちらを振り向きざま、にやりとしながら、車内に響き渡る大きな声で言った。

「アルビレオの信号場を通過。南十字（サウザンクロス）へ着くのは、第三時ころになります。次はケフェウス王の停車場です」

え、ケフェウスだって？ 鷲の停車場に向かうのではないのか。星座早見盤を眺めるまでも無く、私は悟ったのである。この列車は天の川を逆向き、つまり北回りの路線を走ろうとしているのだ、と。



銀河鉄道の夜空へ

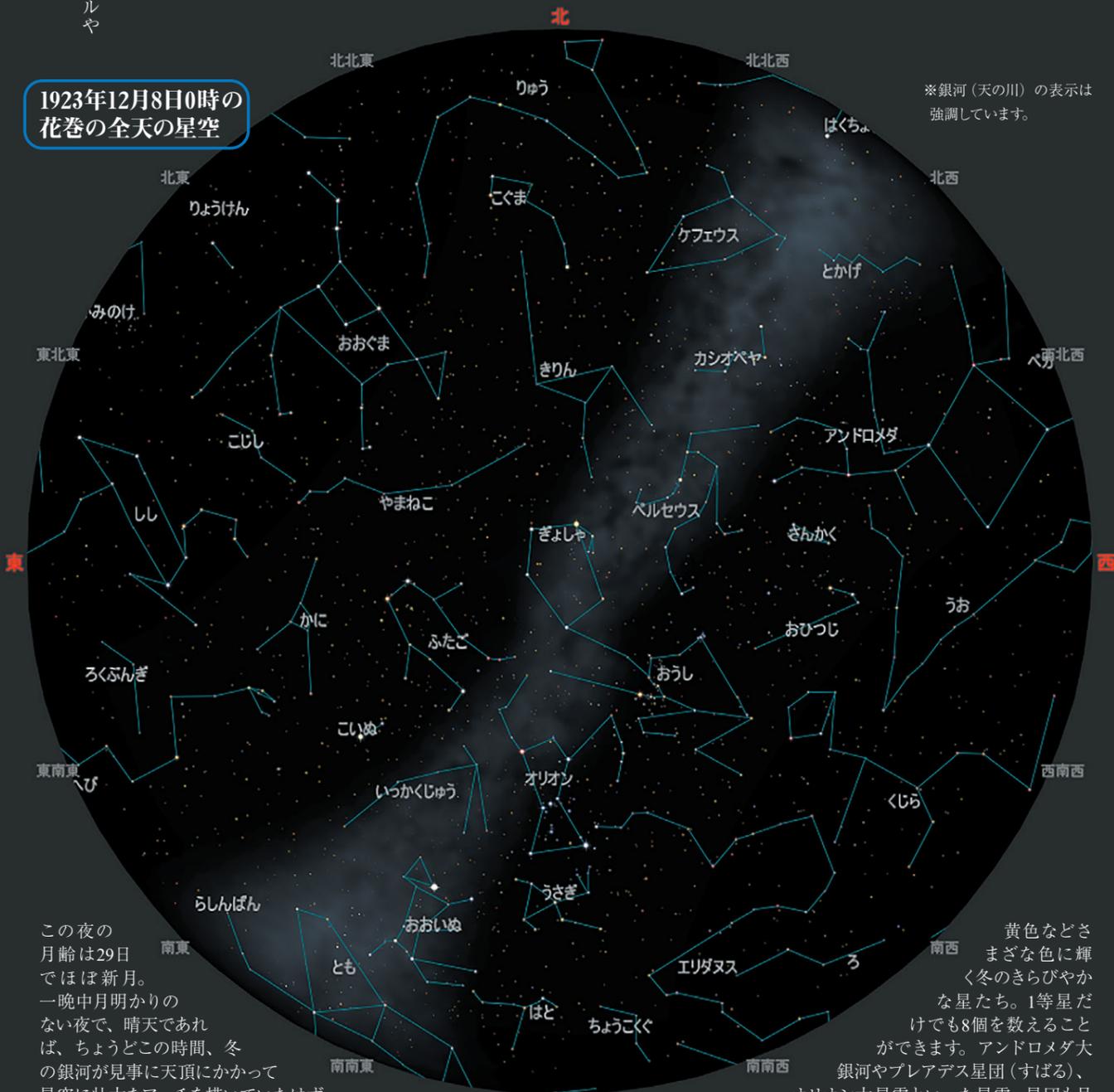
ダイアグラム Vol.01 銀河鉄道の始発駅

あ、Josef Pasternack の指揮する
この冬の銀河軽便鉄道は
幾重のあえかな水をくぐり
(でんしんばしらの赤い碍子と松の森)
にせもの金のメタルをぶらさげて
茶いろの瞳をりんと張り
つめたく青らむ天碗の下
うららかな雪の台地を急ぐもの
(窓のガラスの水の羊歯は
だんだん白い湯気にかはる)
パッセン大街道のひのきから
しづくは燃えていちめんに降り
はねあがる青い枝や
紅玉やトパスまたいろいろのスペクトルや
もうまるで市場のやうな盛んな取引です

冬と銀河ステーション

そらにはちりのやうに小鳥がとび
かげらふや青いギリシヤ文字は
せはしく野はらの雪に燃えます
パッセン大街道のひのきからは
凍つたしづくが燦々と降り
銀河ステーションの遠方シゲナルも
けさはまつ赤に澱んであります
川はどんどん氷を流してあるのに
みんなは生ゴムの長靴をはき
狐や犬の毛皮を着て
陶器の露店をひやかしたり
ぶらさがつた章魚を品さだめしたりする
あのにぎやかな土沢の冬の市日です
(はんの木とまばゆい雲のアルコホル
あすこにやどりぎの黄金のゴールが
さめざめとしてひかつてもいい)

1923年12月8日0時の花巻の全天の星空



この夜の月齢は29日でほぼ新月。一晩中月明かりのない夜で、晴天であれば、ちょうどこの時間、冬の銀河が見事に天頂にかかって星空に壮大なアーチを描いていたはずです。その銀河の奔流を背景として、赤や青、

黄色などさまざまな色に輝く冬のきらびやかな星たち。1等星だけでも8個を数えることができます。アンドロメダ大銀河やプレアデス星団(すばる)、オリオン大星雲といった星雲・星団も月明かりのない闇夜でよく見えていたことでしょう。

●「冬と銀河ステーション」

「冬と銀河ステーション」は、宮澤賢治の代表作のひとつ『心象スケッチ 春と修羅』の最後に取められた作品です。『春と修羅』は1924年(大正13年)4月20日に自費出版で刊行されました。このとき賢治は27歳。のちに賢治のもっとも有名な作品となる『銀河鉄道の夜』の最初の原稿が成立したのが、この年(1924年)の12月と推定されることから、それに先立って、銀河を走る列車のイメージを具体化した最初期の作品と考えられます。そして、『春と修羅』初版本のこの作品の目次タイトルの下に(一九二三、一二、一〇)と記されていることから、1923年12月の詩作であることが伺われます。

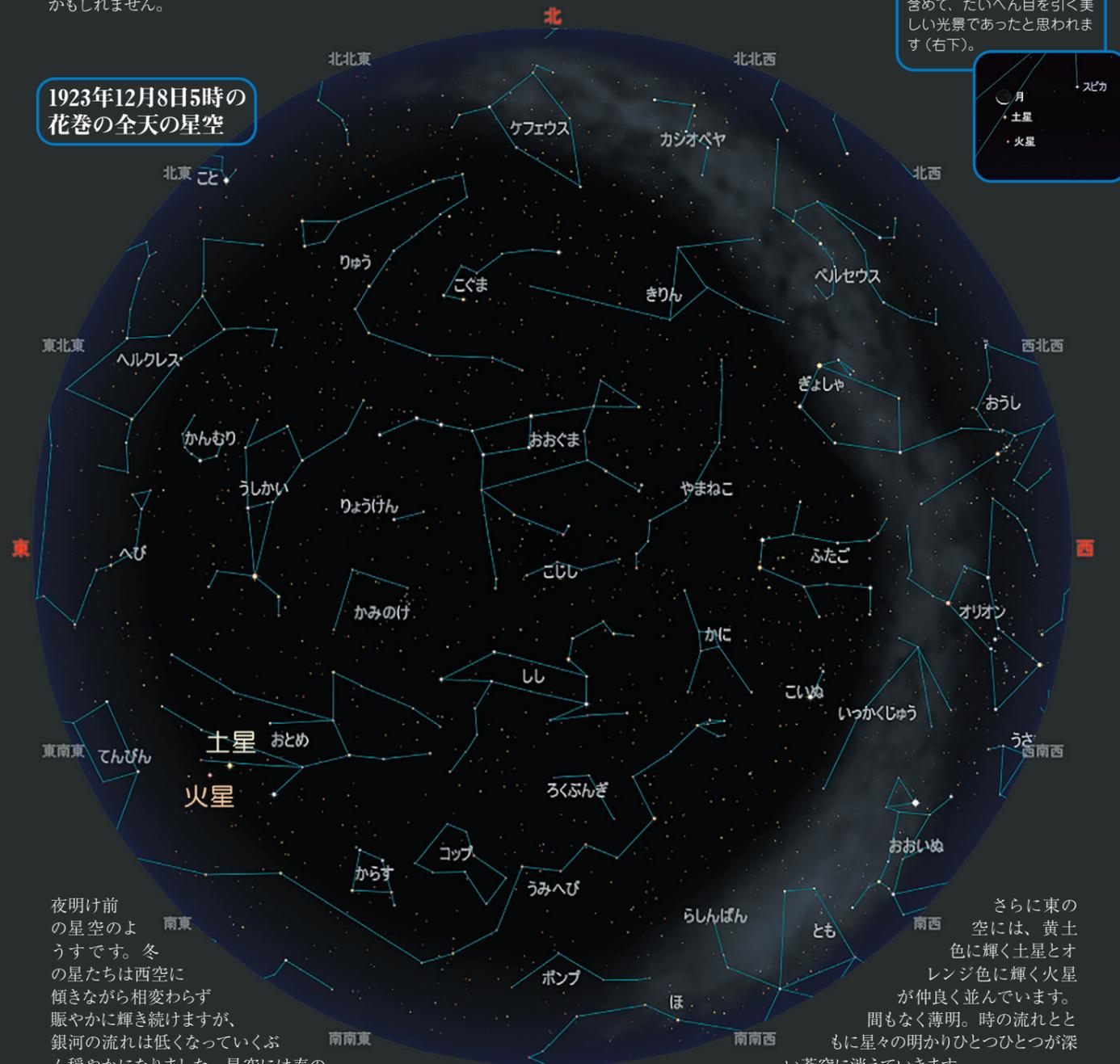
内容は、当時、現在の花巻から東に伸びていた岩手軽便鉄道とその拠点駅があった土沢(※)の街に立つ賑やかな市日のようなすが、星空のイメージとの重ね合わせで表現されています。『銀河鉄道の夜』で主人公のジョバンニが銀河鉄道に乗り込むのも「銀河ステーション」であることから、この土沢駅がその原型となったのかもしれない。

●「冬と銀河鉄道」

さて、「冬と銀河ステーション」に描かれた星空のイメージとの重ね合わせですが、明示的に宇宙や星空を表した言葉は「銀河ステーション」「冬の銀河軽便鉄道」に使われる「銀河」のみで、あとは賢治一流の詩的表現で構成されています。一読すると実際の軽便鉄道と市日の賑やかな様子に銀河鉄道のイメージを軽く重ね合わせたようにも思えますが、みなさんはどのようにお読みになるでしょうか。参考のために、作品の目次に記載のある1923年12月10日より少し前の12月8日(★)の深夜0時と早朝5時の花巻の星空のようすをご紹介します(下星図)。

ちなみに、『春と修羅』初版本の目次のタイトルが、なぜか「冬と銀河ステーション(一九二三、一二、一〇)」ではなく「冬と銀河鉄道(一九二三、一二、一〇)」となっているのも不思議です。単なる誤植なのか、それとも…。

1923年12月8日5時の花巻の全天の星空



夜明け前の星空のようすです。冬の星たちは西空に傾きながら相変わらず賑やかに輝き続けますが、銀河の流れは低くなっていくぶん穏やかになりました。星空には春の星座たちも高くのぼってきて、1等星は10個に。

さらに東の空には、黄土色に輝く土星とオレンジ色に輝く火星が仲良く並んでいます。間もなく薄明。時の流れとともに星々の明かりひとつひとつが深い蒼穹に消えていきます。

★12月8日の星空を示したのは、土沢に市が立つのは、古くから3と7のつく日であつたらしいので、目次の表記日の直前の市日の夜を想定してみたものです。もとより賢治がどのような意図でこの詩作を行なったかが不明な以上、この(天候条件も棚上げの)星空との関連を探る試みはあくまで想像の域を出ませんが、逆に賢治がこのごろ実際の星空を見て着想を得たと仮定すれば、比較的自由に想定日を選ぶことも可能となります。たとえば、12月5日の明け方の星空では、月齢26の月が土星、火星とほぼ同じ天域に直線に並び、近くのおとめ座の1等星スピカの輝きも含めて、たいへん目を引く美しい光景であつたと思われま(右下)。



※現在の花巻市東和町。岩手軽便鉄道は最初、笹花(花巻)駅-土沢駅間で開通した。

●星図は「ステラナビゲータ/(株) アストロアーツ」にて作成。



そのまっ黒な、松や檜の林を越えると、俄かにがらんと空がひらけて、
天の川がしらしらと南から北へ亘っているのが見え、また頂の、天気
輪の柱も見わけられたのでした。

△ 次は五「ケフェウス王の停車場」